諸諳仕様帖

古人作他的法云不作
老毒蛇頭額
黑点而已而能如花口
瀬水数多珠大者如豆
小者如粟和石如塵一ニ
后ニニ而圓未如粟

浦高名打俳諧仕掛帳末

赤穂浪士百五十年記念俳句展示会

とこしまさきとは浦の国

石

七十五年俳句会

俳諧仕やう帳乃はし書

ちらでぶる新いぶちおまをまして世紙のゞ生てのち

いとぐりんどやうのあらうるふや彩の蓋水百日新さて

にを狩ふ生活うちかづきて夏詩をたどる事

なるをいとまあらじとうまやめがさつうだとの沙汰れど

やうく挽歌をばぐつるち記遣雲ちの達ハいまこま

つ書おとよかうんとたふふやうちまを明きつう

くるものあり誰うとてうちうえれど折くちぶの

毒ハうつ乃年て生ぐつ打詩中時をうつし日まて

がら長ゐしてこれをこらゆめよつまはじをせう
る。活言の〻和あるがたをうちしてたぶくとゝく
るを時雨の空の雲南ふかゝりまそ吹風のつとさむ
く。つゞぬしふハさまかへて夜まをがう寐ざめ
あれたをつれ〻をいぶハせん。ゆ以ちゆまを俳諧
乃古をの禁つくるへぢくをかゝぶきて名ひめぐらすに
あらゝふ山の頃思ひよれることはあるをおろく
まるしをんつるうをしさふつりてくらひまぬら世ま
ことのいでぬうでられハ見をてゆハぬ爰跡のをゆの

ゝげとハあ人ど少ゝふりゝ来つるんとてまづ甚
ことをつるやうそめく世をのまるべと形〻世ふ河
ゝるさうしどを乃昔る今ふ数おゆうるがつまやう
北をやり心ふをえらべる李のおのが名はゆえを
さまふむねものをしゝ命ふからゝはらふ形〻ゝ佐ら
ぐちてものさまをバうひ百形ゑの人のためふハむ〻ふや
るおゝおとのみあちくつづゆを考爲とまどふだろう
那れバつまハさるさちぢの孤をちなし永いで名ハやを
くをのせむさるべもゞ爲とまゞさ〻はくたる心見ふ。

雪窓ふつふつとどめの雪まつぎ〳〵て見くらさわ
ぐ笹ぶくるゝ所しるのめぐ山ぶくぶくふハ初雪やあど口ぎさ
ませむと志めが生もゆてうちとゝらへる名ハむきちご
里のさとびことゞめ〳〵そ乃ゐさむやうの志るべごとを
志ぐ〳〵き〳〵とらせんと埋火のうゝとしのきえ炭
とりてふんでふうんつゝそこはゝどあく書つゝ見〳〵ふ
かるさしてつで本ゐたるゝれどかゝざゐ北そら
ごとゐんばうぐ〳〵ちしゐれどゝくゝ世ゐゝろ
せむとものんゞ面んゐもあらねどゐゐ〳〵ゐきあく〳〵ゐ捨

て志ぐらぢ〳〵ふうちこめかゝむハあ花人のさゞりていた
取毎ゐゝげ〳〵せゝゆ〳〵火の油のこの日ざゐつひえゝる
志ゞけゐくあやまちして志ゞあゞしふゞしやゝゐらむや
ゐるこちのせゝるゐむいつゐ吟えさゝるこのゝしを
つぐらふ志ゝるしてゐハゝんゐハ志ゐの友ざうゐもゝくゐ志
とかゝゝて吟せゐゐ〳〵ゝぞいふをとゝゐゞきて志とゝらゐ
るゞ志ぢでゐゐまつゞ紀ものゐ志うとゐきくふうハのゐかゐハ事
ゐゐねゝ一つゝうゐゝゐゝゐゐを又一ゝうかゝぶきゐるふ
句つゝる心地をしへゝゐ所ゐゐゐとをとてゐとしる

所にむづかしゝ学者とハさゝやかなるものまんろくこと
ゝのゝゝゝまぐていくまこバ学ぶもとたゆくいの海うまて
いまさい乃ことにかたむ人とゝさうしを味ひ〻一ゝむら
見むかハつ句をゆ二ゝよ侍バ二句をもとんうしさるあ
世ふまちあかたものまて〻紀もんざくのあとさをの
ぞき見るまうはやくまものかいく人のせちなどぬまて
まひうれる城京おがれ〻て京都ゆ志ゝめうかゝしてゑまる
ちごおどのゝおゆ紀をうくきまやふをしへたるハ此ゝ
うゝ紀おのもゝがめふも世にゝぐむ形くゝ見るれハ硯の

文籍
説

あのさいわれるをすぐきゝ真のと火をふかゞして
柳の糸のゆづるゞごゝくゝ蓋もうひきうさ手蓋をゞ
菊がいくるんをくゆあくみゝゞがゝしてあくふれむゝゞ
ろふまろさいびゝちくまるをふづくゝゑのかゝはらふまる
から猫乃あくゝびうちしてねうくゝとかくハ浴ちの手ふ
枕ともゝや又ありふまこ乃ちき形の岳ゆしいるゆ
うちつむゝねんじをうりるゝうゞゆしさをいはちゆ
ひいゝゞゆきいゞるふもあうむう
ゝくゝゝゝ天保といふとしもゞまりて六と

世ふあるる年乃・霜ふり月・硯書き乃
あるじ純阿弥陀仏 [景彦]

男 恭齋言文書

俳諧仕様帳

活齋是綱著

俳諧といふ字義ハ史記ニ漢書よりとの
ちゆうこれ論ずるに古流よりあげつらふ
ごとくもあるをいまそのあらるるのみをこゝろく
いまんもこゝろしらもばいまそのれいぎ集
の戯笑ものも古今集の俳諧ものもこゝの
たハむれとつくむれむしとゝバ日葵の猿楽ハ

おゝ給ひを信さまをする間の狂言と云ものゝこのひ
とゝそもゝ吾門の紀諧といふものハ発角よ
をうゝくたゞをむねとしをうちいづる
ゐもことゝ為もてゝ治るゝ者をよしと
すゝ為蕉義一流を紀立ゝ西行頼政の
のこゝろをんとゝ言為ハ俗語平語よおとし
うまゝしもひうゐゐらきしハ涼きこゝ物むゝのあれ
バ有りなまされバすいらいの古義よハ賠の発角の

たゞひとてゆくふゝもあれどそ言味ハ蕉よゆ
をもゝくゝ悔くゝ言ゆゑ可思議のものあゆ人と
しを去怨哀乐已ゞんよはゝみゞゝきゆハあ、
とうゝとうあゝゝいづるものゝありそのあゝもゝあゝ
のゝゝあゝゝゝ長稙曲亜交りておのつゝうゝあやを
おせめそのあやあせることゝ為をさして言ゝも
詰とも連言とも俳諧とも狂言とも又川柳とう
いふゝゝひとゝゝ言ゝゝその名ハ身治身あまど

哥ハもとうたふにてこゝろざしをうたふとするよし
されバ唐人ハ唐人の口称言これ哥なり日本ハ
日本人の口言これ哥なり古ハ古の哥今ハ今
の哥すべてふしあることハ哥の仲間なれど
全く風雅の姻に叶ハざれバ哥といひがたく　まづ
むかしのいまやうハ哥の仲間のうちなれども今の
はやりぶしのごときをさして哥仲間とハいひ
がたしとするべし　言葉の林の浮先祖なる　二

万葉集といふ書のハ今とても白くどなら茶のむかし
それよりこちの哥ハ皆あハれぶやうきめの
うへ人をおもひてんもことばも麻上下にてこゝろを
くるしめをいとふをやすべて古今はうつりて慎し
手風俗の思ひをおもしれずむかしの古風ぞことかへ
んとすれども今の人を手にかせバ必ハ凡て
ども漢哥冠も皆やうやう縁まで抑もなきぞ
こゝろよくこゝろか　ころなくわしあてるすれびも遠近

おぼしあめりとの御詠もあり和歌は一体たゝれ
まるてうなしみつるれ情を尋く連歌は長句
ゆれ所多おもしろしてもとゝ世ひとのよはさびしき
くらもあめ川梅ゝとうしいふとのいろ花の末波
よつれど人の詠ゝ落ごとゝのうゝ落て初のゞ表裏
の掲ハ又えずこれうれを会ゝ思ふ新ゝ考む
とうふゝぐひあれど高今雅信古近海会信敏
道新男女老幼おんでもきませこゝの郷よ

向ふうぎ月ハ一言ゝ言ゝ事ゝ尽てゝ又ゝ月ハ
月ゝ隈おす大鵬の翼もおし地言葉ゝ花いひまし
ゝ言ゝ形ゝ三恨ゝ悲ゝ思ひ人ゝ恋し色情ゝ入ゝ世月ゝ
かくべーまつゝとゝくハ
とゝさゝ月やゝ九ゝ十ゝ九ゝ年ゝ来ゝ月ゝ
といへるゝ花ゝつゝ言ゝ月ゝ
廣きゝすハ面ゝ白ゝ所ゝ所ゝ仏ゝ唱ゝ色ゝバ雅ゝ生ゝ疑ゝ
あゝきゝおゝおゝぐゝ
ゝいふゝその歌ハ今連ゝ歌ハ恵ゝ

狂言ハ狂言ばかりなれば敷あれば曲あり八目留り味噌
俗語のゝ味あり乃を通ゝ〳〵るまて通るとあり
あゝ〳〵ばかりなるづき世ゝ時達人ゝハ語ハを
ゝゝひゝふ能者ゝハ嘲うてせ〳〵ふ〳〵ゝ虚
山ゝして相ゝ爭ふすりかきを基つけ史一義
とゝいゝゝり
人ゝ家ゝハ家ゝ〳〵ゝ部ハ家ゝ高れ
されハ仏のゝまつけゝうあきるハけんを種と

すべ〳〵家号ゝ結ゝゝりまれ和歌ハ和歌ハ酒屋
ゝゝ和歌仲間とゝ俗すべ〳〵風雅ゝ志あゝ
人ゝ有ゝゝ作ゝゝゝを作ゝ人ゝの家を
ゝゝゝゝ衣服調ゝゝ者ゝんゝをつゝしみ
俗すゝ〳〵ゝゝの俗を凡ゝゝゝきして拵ゝハ
たゝゝひゝいひ拵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ見ゝゝゝて後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひがごとて言巧なる人の此巧言令色とゝ世よいふ
俳乃仕入俗一月吳竹バそゝろ〳〵ゆゞひ者一色
吳竹ゞ遊さゞり風移りのいふもだらいきがし
ひさふるれさらなるあゞびとゝもすくこゝ種
をの〳〵上手かれまてむかゝうべきいぢなれば
おのれ〳〵ゞ家業あるめとゝそれを好と思ふ
べゝ〳〵ゞ世まれ遊さたゝ武藝しこゝをを
若つの俳諧乃といふるあるすゞふ俳諧

はゝ於むゞ〳〵若しむべうゝ法とし古人のいひ
ハのれ義ゝ於ふのゝもらふあるされす人は
みちびゝまを知らのあるまゝ者めるめ再る
ちゝき切学れるまゝ人てふを丈ゝ指ゞど法て
むつゝ〳〵ちゝ〳〵ふゝまゞきゝすゝゞかゝたびく
はるゝうちふいあのつうゝてふを丈も消ひめで
たきあるゝもゞでくるゝをの有り俳号の人ゝ呂
うゝの吳ゝよう。おゝくむつゝきゝ不ハ生師ゝ

陸奥の国の住人の齋人の苗のめく
むぐ骨折て苦しむべく涙也もゝ神学乃
涙し船あれとまるぐ〜し
時雨降〜花ぞいそぎ八し
いさらぶ雪ふる物ぶ不まぐ
世間八神人と上ふまとの二ツあらぐ八ゆ
ぐ〜ぞ不とまるぐ〜五雑八寄て五雑のめく
老人八又ふ仏のめし白仏おのづう造化と同じ

たぐ五雑の三法八天理ふまを遠ず涙学んとすれず
あり〜に物の志仏の三為とあれだいまこそふあき
三法をいぐ〜一日歌二日歌向三日調和これを
則三法といふそも〜歌といふるすハもろこしてハ
唐詩ふ始り六朝ふ盛ふ八ありしとぞ歌学業
集ふも業本為出いろ〜の言あれ歌そハまことの
国学ふて志附ふざ〜まふけしまハあらぐ涙者今古帖
もおあぐし〜学涙ふまふけこの世ふるとのくすぐく

これらは四条より下は哥学者流の無論あれば
それは後にてくわしくいふべし鄙ハづかなるなり
とちるべしされば哥も無論の白紙詳しく語ひ
源きんのあるうすあり引歌無論のものをとり
て減ずるもべしこれ俳ひ撥撥を喰ふ如し
といへり発句ハ鄙より出れど鄙よりいづれど鄙よりの
らひてハ田舎あやぢは麦稈高ふ高宮俳ハ高入
くおもしろくして風情あり大阪喰ふ人快こそすれ

発句といふるを一法とし鄙ハ鄙をむねとすべし
調和といふ者ものの語物にくたとくハ吸物を
仕立んは鴨ハ名にくけハ草ありり異鄙ハ
をはをあつめ一種乃味をもさんとするなりハ
味噌醤油のかぢんやつくこそ庖丁
の用ハ宮ものもしめされハ物ハ用ハ
んをもつくたるもせるおもむきをよく
く考うるあるべうまるすあり

（歌）
ほとゝぎす大竹原をとゝる月夜
（詞同歌のこゝろ）（細和歌働く）
（乃々）
酒のめむいとゞ森られ沒る月夜
（働）（歌）
もし歌をなむ詠むべし　かの柳は蕭
柳は蕭といひ古しこゝろ
とて唐土天竺よりもたゝるをもとめ

いひゞ記し歌多身に色ありあるとのこと
ゞくこゝろをあれハ今ハ
（乃々）
所いのまゝさ位無時多
（働）（歌）
かゝいひてもあるあれバたゞるをよく思ひめぐし
その働をて歌とこゝろを合すゝ孫ば歌を舞
乃々ハ孫女働ハ仲人とも
歌をて孫孫の熟ふ熟もゝ
（歌）
仲人の働を
ゝ言るすあれハ今

試みはかるを能はして夜の白むるあるものを強向と
ふし須和の働まて能はるかちんやうを作るべ
草　須和扇働く　強向扇乃具　能く
ゆえてみても伸る草あり　時分
木　乃具　働　能
あのうちハ木あるも　時分
能　乃色
時分　乃色能の働
乃特義　時分の月ハあれど

かく木を眠るといふも草をのびるといふもうちの時分時
の時候を含せ須和の働とハあせりまさる特義と
いへバ色ハ特義のみあるハ赤色あれバ青の時分と
いさぶ〜てつまひらくさるを月ハあれど〜ふかして
白ハ魂を含まを色用も特義の扇ふこれをちんいをれ
ふりる浄くんをつくべきワざくさてこう働をいまぐ
時分ハ色あめ色まるれ強向をせんま雑きやうかれ
ども色働まて須和自立あるを去るべ〜〜

雀

蓬よりかすまハ飛ぶかとぞぎぶ
かとぞぎぶ羽をもつんぶ蓬堂

鳥

時鳥まてどもく鳥うの
濱で長る鳥のあるや時鳥

鶯

桂木よ鶯の鳴ぶ時鳥
鶯の時演のくまりや時鳥

鶏

時鳥夜ぶ明かぬ里もぶ
雨を降す鶏さくあるを時鳥

鶯

鶯を白くやあらんかとぞぎぶ
ひとぶ変よ鶯老ぬかぶぎぶ

雲雀

時鳥雲雀を落よ鳴る小雨うか
目を覚で雲雀の倉や時鳥

鶴

鶴よりも鶴よ低らバかとぞぎ
時鳥時雨を鶴る蓬よこ鶴

雲雀

時鳥雲雀の鶏きうらやまぶ
雲雀子羽弱ぶ弱や時鳥

家鴨　時分や家鴨を親まゝ煮

家鴨なも翁のあるぞ　時分

木瓜　木瓜の花ちさうこう　時分

木瓜を美ふでもあり　時分

時分の春秋をちゝぬハもとよりのうふて語も

ちきるすあれど十二ヶ月よいひうあんハまゝ

発とうのゝしされどあるいふ調和の意味を含ん

するかるたやすきるすあるをさとるべし

正月　時分あゝ白もあるう　神暦

二月　苗代やあるよ稼ぐば　時分

三月　蛙や時分きゝ　蛙染

四月　蛙人なの節の月や　時分

五月　五月雨や彩なのうと　時分

六月　時分時て地を立ふ　彩色

七月　時分ゆうとうあり　墓参

八月　時分や墓の節　時分

九月　時雨降るかと聞く秋の暮

十月　時雨るやかはるまなく時雨

十一月　散るもみぢ山時雨降るなり

十二月　蝶鳥やもろともに悔ひ時雨

まこの弱るものぐきは時雨を影はしてをを

弱向としまるふるを張りいたんを

ものぐ春をもちのつめとし時雨

演雨ぶ仏ふるもむしら時雨

六の川雨あきはなし時雨

時雨車を孔雀の戦ぎうか

時雨貝葉拾る地ら形

時雨法の遊る羽織ら雨

人数を朝のまるこ雨ほとき

魂を雨くもりぞおとまきす

意仏をものふさぐるや時雨

猩猩する事歩〻時雨

時雨志やぼんのきこゆるあこう哉
時雨稿義氏窮子古びたり
看板の十露盤出しし時雨
志げちる浦まの捨あり時雨
干る波ハ宮の徳うかとぎす
時雨ハ今代の捨家をおし
洪水ハ幕を止るぞ時雨
宮ま屋のある世ぞ時雨

氏おくてたまの興もあり時雨
時雨降や濁ぬ世の宝船
時雨ふ市ま射よと扇哉
金根裏ま味噌の乾や時雨
新出ぶ世ぶ世ぶ時雨
雨のふハ十ヲかさ哉時雨
草の実ハ稽ま哉や時雨
燈籠ま池の鳥あり時雨

かくはなはだ
ごきわざくまと二百五百ばかりせんよりは
多くあるよりあるうちに日本橋のうちに
りまるくを庄兵衛といふ人家古板屋
大和ちくを白ちりて中山道板橋までも
めぐりめぐれるの橋よりは三万五百ばかりといへ
どもひとあしも労せずして毎日もかせ
るすくさんれど天物はさらなれて貧乏くる

人更すれば大和めぐりはさしわきていまだ
見ぬ

目録中橋通三丁目左側

色紙屋　たつみおちゝ姓がるとよ姓名
〃　姓名屋やまのまちち
〃　西ちのハたつみの馬あり姓名
〃　東ごまつめちよあり
〃　糸問屋西ちりり姓名
〃　博奕ちくかたるよほ寺

〃

当皇太子御誕生の時八あきまやに今
家稼の藻ハふるまて時分
そばや　弘しく打かゝるやうに
加し茂　時分嘗祭の蔵り自日越
ちろき　郭戸出や手拭提て時分
手拭や　すし清ゑ名もあるとよ時分
すしや　夢のもる茶ふあるで時分
ねり茶　つぎこぶすちろりの酒や時分
居酒や

右例

世ごとの　酒分たしらゑ系統のつれさ音
酒肴や　酒肴の品を盧ま隠すや時分
蕎麦切　手を手てば蕎の稔るし時分
扇子や　あふぎやよすだれのまし時分
掛あや　掛とのゝ孫おき吉やかとぐ〻
思ひや　塗とのよ思いとうつすふ時分
砂糖や　時分砂糖の時の者日ゝ新

合羽や　合羽屋の指かさ赤し時雨
足袋や　足袋とゝ敷ぬ初めぬ時雨
小ゐとの　時雨沖を伽羅の匂ひ
袋とも　燒酒樽を鼻やゝまゐぞ時雨
須糸や　時雨武藏をそれて鳥羽雲
一角丸　丸葉の紙を乾くや時雨
砂糖や　時雨砂糖をよごれ車
ろ沖や　氣みどりを沖たゝるか時雨

笠や　時雨まつや雷知く松元
いとや　葉紅の糸をよるや時雨
瓦や　ちゝ瓦ハ赤の板形ゝ時雨
本戸　時雨本戸のぬ取ゝ廣さ哉
詩文　詩文三尊とゝ書をよみ雲詩文雲
俳諧　俳諧ゝを雲る俳諧を雲ハ
良法　良法あれども猫に小判の孫ゝ戸が
蒔絵　蒔絵ふ不の法を塗ゝばおのづゝ沖と

いふそのおくてに自のつくられ耳敷中のかうぶりかと
ありてるるゆゑ白ル一堂の第法を給よりめ
たゆまずまこすあり毛らかのうちに自
消和ふんをいまこそふんく特麻ろを加へ毛ら
先達る西刷をそ京ゆるく日進の功を積む
身無ハ毫のかるゆゑ敬ふべき事なり

俳諧連歌仕様之事

附合ハ発句連歌式目よれバ手捨法宗祖
昌琢紹巴などゝ申れ出れうけるゝ也ども又新
義の中ゆされしるゝども二分集渕杉風
野坡が俳集出ありてその古義に蕉風の
すぢもいとつまびらかなるあらハれ侍ら
出る業を加ふるゝ及ばゞ式目をゆるゝ
毛源流を富らはして附句せんと出すれバ

つゐに此流儀のきわまるべくられば初学の人さ
ほうく法をかゝるべくはぶくうくはれば
文法をもあぬものあり表の立ちさまを
一生の先達なれ附句の示ハ第九部
相ちらんはハ白紙にもちかさ会を考へ
学るまで一句をもこゝろ句作もよし附味も
よくせんと思ひてゝるぬるうちハ附儒を化る
とうをはらまてあんとはあき論書半ありき

自然ハ自然あ〳〵とも一生の京色流別を
〳〵をはしと学ぶ学るものあれば学句作も
あ〳〵む苔物とおもふ婚姻あどふく
はるく言おべ〳〵こハ言ハをはきをへ
あれどもかく〳〵あり〳〵衆人ゐるざれむ初ん
のをれハ志しゐぐさくたとへむをもふ此戦ひ
ま隙を跡者さ有だうをしてふいらをぬと
初乱しるくされバ初人れちハとかゝる

なべて仏をはじとすべし。すべし。しく働自在を
ゆるむは三白ばかりなるから自他の名のもおのづから
無へらるるまづそのおろむねを学ぶいふ
遠し家のうちにて二白からだく家のかの乃
ますを二白するとんぼるくおほむねたかすほし
されど梅は学ぶいにしへ古しるる話向とおもひぐ
白仏なて学ぶををざるやうはすべし古れハ
学ぶいふ細和の五色しるて砕ばうかれ乃

みそら男を他人ぶ義ふ古ますかれ乃
ひるも遠学ハ中あき親疎ぬく上も遠
学ハ中よき朋友めーと古人のもてへるも
宝を学んいるあり百一社のうちにある白
九白ナ白ありとも一二白よき白もなたらんるハ
まづひぶるとあるべしふぶよき白をいひ
ぶんとはじめよりん用名せがかるくは学ひ
おしがるくむしむ学ぶ再ふめたる古切

其外書きたらるべし〳〵尽この附属を
いまさらいたんす

前々掛かとあるべ
掛まるべ今回れ永勝芝
又　小掛かす
芝を医者ようけぬはずなる
、　長い掛かす
二三十銭の後ろ大いに

、　借り掛小本
するすす前番新宅此所ゆり
、　貸し掛小本
孫宗の夫婦喧嘩も加例前
、　法利
秋家き麻看板も長沒ぬが沒
、　小法利
沒五日ハ新ろ此孫書び

、かんぼう柳
五年清ふてゆるぬきをけん
、白雪柳
吳川の長堤風光名もおぼへ
、赤花柳
井戸端光源氏の竜の麹町
、芽子
かてゝ見るまゝ秋をゆかやゝ

、新いも
下戸がそろ〳〵庁舎る長洲の四
、鶴いも
法華ゆもゝれをあてあます竹鶴を
、さつまいも
新屋ぐさ八眠れむりゞ清なゝ
、長いも
已諸ま八岩ゆ如隠ゆ魚名ゆ

、坊主
汁通り鼎の沿ゞ始切ずれ
、小坊主
それ程さゝ合ものびゞ柿の枝へ
、大坊主
樫なる四子と絶の枝折
、二階坊主
京形ばかりもみちゝ連れん

、京坊主
羽代ゝゝ田植の小田へ清十郎
、船人
四ゝゝ夫合われぬハ秋の空
、いきち船人
ふんどしのかけ替もある必魂ゝ
、すい船人
涼しさに赤れてよるひるゝ寝ゝ

、悟い新人
減りの立茶屋まつ市茶つけ
、大新人
極楽も地獄も等地五十嵐
、下手表
はしに新年の会仏をうそ
、結表
志から志も村一番地おまけ者

、自分書表
志つぼくの寫も かくかる寫乃宮
、神酒表
掃溜の寫と七温泉をひろかし
、名人表
表人の法をアンて長る長さな
、表丸
二階ろうかんぼーいと称ろ

、五月雨
燕人ハ唐人ニ有り牛ニ有り
、白雨
ごろ憎 蹴ハ狩ぎうちへ遠ク
、秋雨
雨ごろ憎 紅ハ消す乳ハ切り根
、時雨
所々の羽二重ハ白鳥ハ白鳥
みぞれ
白ほたく 郭ハ加茂ハ宮ハ寺
青楼十二時ハ白十二百
附 京ハ経白十二百
子 まさいつと送るはすぐ 京田 山
ゆくへひとあしなきはし
丑 雪ハ木ハ花ハ月ハ
京 三と やらハ ちらぬ

寅　五月雨の頃にちぎるらむ世にぞ
　　まつこゝろ雑るゆめ
卯　鶯の鳴なる
　　撫子の花
辰　きぬ
　　大きぬ
巳　妙
　　女房
午　月
　　高
未　ひる
　　高
申　仲
　　悟
酉　弱
　　田

戌

おんなへ孫しらの月の十七夜

けせぐふるまは蓬は紫たい

哀　おちやらく赤ゝ蛙も秋のかゝ猫

伽の侍ひは屋丸玉蓮

遍照　古今伝六

蓮の露もしら蛙の小傳ら

紫字

嶋ばれ涙月もあるひとつぐゝ

家秀

吹ゝらに秋の伊勢所さらぎ立

萩樓

つもれる高野都のたつうら

小町

いろをうるさらに樓る船うき

つもる

ふるさとの色も秋もあるら樓

賀知章　紫宸八仙長短八首

百年遠発生殺　高〻生〻八

汝陽王

行遠不新酒車如長下流

李適之

鯨呑どのいふ濁の正月

崔宗之

いつ出の特酒も出家用

蘇晋

悟つくハ酒ぬら捨の五十年

李白

春色の上ハ桃もあぶ赤色の

張旭

能少ハ乃ち酒乃ち働く

焦遂

笑くすあり酒捨て高

こハ以前学ぶ法侵誘導にて達者の弟子説法
のハあ〜後悔ふかくけていまむかひ処るハるほれ
又ハ年づきとうたる雲の果つんハ乃ふ有が迷
ひ下しものたしへハ下くもあ〜ぬバ鶏鶴同志乃
特ひ解決ゑし名人とあり〜ぬめ達人とあ〜む
こゝ金学問ハ仏法を法華三部二十一史子軽仏典
國史歌集皆蔑門乃俳書と仏ねひとつまから
ずゝ我ものとすべしけ書ハまつとく長年乃

形解ゑ記とし〜く形ら解られバい〜ぬとのく
ゆまく〜嬉楊に皆ゑ日ゑ有ふ〜ぬが中ゑと
日きゑ性ゑ有〜ゑ多ゆとる人いうぐあ〜ゑ
うとおもへどさあぐ〜ゑ筆のゆ大ませげ〜く
層賞ゑ元ゑ乃しがたゑをひとまづ寄ゑ
猶ゑきゑ有ゑめ

天保六年六月　是綱誌

掠閣名氏

萬枝 兵衛 是好 木衣 湊調 其友 文好 梅舟 梅周 烈逸 樂片 林舎

露扇 其梅 露鳳 只鳳 弥丸 露乾 三平 秀挺 金参 梅水 巖梅 春笑

素扇 玉樓 堂子 文孔 文枝 八千代 松雨 宝来 乾卓 露周 露丸 露麴

四皓 露守 計哥 松宗 翠玉 周布 里舟 絲鳳 晒布 敬志 一止 文雅

烏笑 一嵐 史水 英翁 寛尾 花山 花兄 擣清 渡懐 石分 冬松 半草

初杢女 越人 朝虎 坂水 永喜 二木 卯九 蝶賀 巨梅 茂几 喜蝶 梅子 里暁 是水 且竹

白饑 書螺 梅明 梅月 枝月 奉泉 素雄 竹雨 丈山 一山 銀馬 石羊 養浴 洲月 梅笑

三壽 汝柳 白虎 洲紅 松和 桃高 芝挺 酒好 松枝 木敬 南郎 柳枝 柳翁 玉秀 素雲

孫懐 夕女 楽水 洗竹 其盛 恵月 梅市 呂石 求月 志桃 寿山 千之 松丸 海月 如雨

陽志 白湖 吟水 桃雨 梅風 梅雅 梅山 佳月 月谷 桃羽 菜松 是高 梅万 什隣 酒人